



緩和ケア病棟開設 25 周年記念号

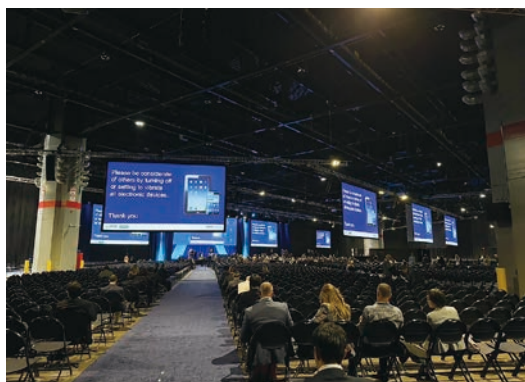


第27号

5年ぶりのシカゴで考えた

緩和医療科科长 井上 彰

以前の『七つ森』をご覧になればお分かりと思いますが（バックナンバーは東北大学病院緩和ケアセンターのサイト <https://www.cancercenter.hosp.tohoku.ac.jp/kanwa/nanatsumori.html> から閲覧できます）、私は本誌への寄稿文を6月初旬にシカゴで開かれる米国臨床腫瘍学会（ASCO）の出張中に書くことが何度かありました。ASCOは世界最大の「がん治療の祭典」で、世界中から5万人近い医療者が集います。そこで発表される研究成果の中には、近未来のがん治療を大きく変えるものもあり、がん治療の専門家を名乗るならチェックは欠かせません。昔は緩和ケアに関する演題は少なめでしたが、2010年のASCOでTemel医師による『早期からの緩和ケア』の発表を聞いた時は感動したものです。当時私は肺がん治療医でしたが「この研究は高い評価を受ける」と確信し、実際に後の論文も最高級の評価を受け世界中で緩和ケアが発展するきっかけとなりました。それから14年の時を経て、今年のASCOでは同じ研究グループが『早期からの緩和ケアの発展形（遠隔緩和ケア）の有用性』を発表し、7,000以上の演題から5つしか選ばれない最優秀演題（プレナリーセッション）として、数千人の聴衆から大絶賛を受けていました。その様子を現地で体感することで、今後の活動に向けた新たなモチベーションが生まれると同時に、まだまだ至らない自身の未熟さを省みる機会にもなりました。加齢と感染リスクを言い訳に出不精になっていた私でしたが、円安の痛手を被りながらも参加した価値はありました。



COVID-19の流行以来、国内外での学会や会議への現地参加の機会は激減し、オンラインでの参加が普及しました。それらは時間効率や旅費の節約といった点では確かに有用なのですが、「場の雰囲気」や「相手との距離感」を体感する機会が失われてしまいます。発表されたスライドを自身のパソコンで見ても、会場のざわめき（時には失笑）からその内容が聴衆にどのように受け止められているかを知ることは出来ませんし、会場なら仰ぎ見るような立場に

て勇気を出さないと質問も出来ないような発表者（発言者）にも、画面越しだとまるで対等の立場かのように話しかけることが可能です。良くも悪くも判断するのは自分1人なので、ともすれば間違った解釈（対応）に気付かないことも起こりえます。最近チラホラ見かける分不相応な立ち居振る舞いの若手も、自他の距離感を学ぶ機会が減ったことの産物かもしれませんが、相手との距離感を正しく認識することは、患者さんのみならず他の医療スタッフとのコミュニケーションにおいても極めて重要です。ASCO規模の学会に参加する緩和ケア関係者はごくわずかですが、（日本ではほぼ不可能な）「大海の中のちっぽけな自分」を体感することは、医療人として成長するうえでも案外重要ではないかと考える今日この頃です。

COVID-19 流行の面会制限に対する遺族の評価

緩和ケア看護学分野 教授 宮下 光令

今回も「七つ森」に執筆機会をいただき、大変光栄に感じております。私は日本の緩和ケア病棟の集まりである、日本ホスピス緩和ケア協会の緩和ケアデータベース委員会の委員長をしております。今回はこの委員会で行っている遺族調査の結果について書かせていただきたいと思います。

ご存じのように COVID-19 の流行によって日本のほとんどの医療機関は面会が出来なくなりました。現在もある程度の面会制限が継続している病院が多いと思います。緩和ケア病棟も例外ではなく、一般病棟よりは基準を緩めていたところが多いのですが、それでもほとんどの緩和ケア病棟では何らかの形で面会の制限がなされていました。

日本ホスピス緩和ケア協会では、緩和ケア病棟を利用された方に対して遺族調査の枠組みを提供しています。参加するかは施設次第ですが、2024 年 7 月現在で 150 程度の緩和ケア病棟がこの遺族調査に登録しています。今回のご報告は 2020 年 5 月～2022 年 5 月までに遺族調査に回答された方 998 人の集計です。

この間に面会制限があったと認識されていたご遺族は 80%の方々でした。面会制限は人数制限や時間制限など病院によって様々でしたので、例えばもともと面会するご家族が 1 人という場合は面会制限があったと感じていない可能性があります。この面会制限があったと感じていたご遺族のうち、「家族は寂しかった」と回答したご遺族は 80%、「患者は寂しかったと思う」と回答したご遺族は 76%でした。面会制限がご家族や患者さんに大きな影響を及ぼしていたことが分かります。「重症の患者では面会制限をするべきではない」というご意見も 56%ありました。

それにも関わらず「面会制限は仕方なかった」と感じていたご遺族は 86%でした。この結果に私たちは少しホッとしました。確かに面会制限はつらいものでしたが、ご家族のみなさまにはご理解いただいていたということになります。また、「病棟スタッフは患者と家族が交流できるように努力や工夫してくれた」という回答が 82%、「病棟スタッフが患者の状態をこまめに連絡してくれたので安心だった」という回答が 67%、「スマートフォンやタブレット型端末などで患者と家族がコミュニケーションできるように配慮があった」という回答が 43%ありました。緩和ケア病棟のスタッフの奮闘ぶりが伝わってきます。

病院や患者さんによって状況は変わってくるので、皆様が関わったケースにこれがそのまま当てはまるとは限りません。しかし、COVID-19 の流行は本当に不幸なことでしたが、それをもとに日本の緩和ケア病棟はケアの意味というものをもう一度見直す機会になり、いっそうたくましくなったのではないかと思います。このようなパンデミックはいつ再び起こっても不思議ではありませんが、その際には今回の教訓が生かされることを祈っています。

● 緩和ケアに関わって思うこと

緩和ケア病棟師長 今野 恭子

緩和ケア病棟開設 25 周年を迎え、七ツ森の原稿依頼が私に届きました。参考までに師長室に残っている緩和病棟の立ち上げからの資料を見てみました。その中には大先輩の看護師長の名前や、一緒に働いたことのある看護師の名前がありました。遺族会や季節の様々な行事を行っている写真からは、楽しそうな様子が伝わってきます。正直なところ、緩和病棟が開設された頃は外科系の病棟に勤務しており、開設当時のことはあまり記憶していません。そんな私が 25 周年という節目の年で、緩和病棟の師長をしているとは予想も想像もしていなかったので不思議な気持ちになります。

そんな私も緩和病棟に配属され 4 ヶ月が経過しました。毎朝リーダーと病室のラウンドを行うのが日課です。ほんの短い時間ですが、朝の挨拶をして手や足、体幹に触れ昨夜の過ごし方などを聞きながら前日に比べて少しずつ変化していく患者さんの状態を確認していきます。この病棟は、在宅から入院してくる方、治療を続けていた科や他病院の治療を経て入棟してくる方がいます。そのため今までの経過やご希望をできるだけスタッフで共有し、患者さんやご家族が安心して過ごせる環境を整えますが、入院されて数日でお亡くなりになることも少なくありません。数日でも病棟で過ごしていただいた患者さんとの別れはやはりつらく、気持ちが落ち込むことも多くあります。きっと患者さんと過ごした時間の長さではなく、患者さんに対する思いの深さなのだろうと気持ちを切り替えながら、自分たちができることお手伝いできることを探し続けています。

先日、院内の診療科から転入されてきた F さんという患者さんが、実家のある秋田の病院に転院されました。緩和病棟に入棟されたときから自分の故郷の景色が見たい、秋田に帰りたいというご希望を口にされていました。姪御さんのご協力を得られ、無事に地元の病院へ転院し、ふるさとへ帰ることができました。患者さんの限られた時間の中での調整でしたが、なんとか自家用車で移動できるタイミングで転院できたことにほっとしました。そこに至るまで、医師や地域医療連携センター、スタッフが帰してあげたいという同じ目標で取り組んだ結果であり、患者さんのために時間をかけて話し合う、意見交換することができるのは、患者さんとじっくり関わることができるこの病棟の特徴であり強みだと思っています。

まだまだ緩和ケアについては初心者ですが、緩和ケアとはなんだろう、何が正解なのだろうと頭で考えるだけでなく、自分だったら何を望むのだろうか、どうして欲しいと考えるのだろうかとの自分の人生とリンクさせて考えてみようと思います。一年後の自分が少しでも自信を持っていられるように頑張っていきたいと思います。

🌱 “いつも通り” の尊さ

臨床宗教師 金田 諦晃

「病院に来ると、病人がさらに病人になってしまう。」生まれて初めて入院を経験したという方がおっしゃった言葉が心に残りました。この方によると入院中ことあるごとに書類へのサインを求められたり、一方的にお世話をしてもらう日々を過ごすなかで、どんどん「病人」であるということを自覚させられるとのことでした。お話をお聴きして、この方が自宅で過ごしてきた日常と、入院生活に大きな開きがあることを感じました。

あるご家族は、会話がままならないほど状態が悪いお身内への付き添いに、不安や戸惑いを抱えていらっしゃるようでした。その後、幸いにも状態が回復し、だんだんと会話ができるようになってきました。そうした中、ご家族は、本人が家族に対する愛情や感謝などの気持ちを、素直に伝えてくれないことへの不満をおっしゃっておりました。

しかしながら、それは病気とは関係のない、普段通りの本人の姿でもあるとのことで、どこか嬉しそうでした。ちょっと変な話かもしれませんが、“いつも通り”の尊さにふれさせて頂いた場面でした。

“いつも通り”に型はなく、十人十色だと思いますが、病気による痛みや、さまざまな辛さは、いつも通りに過ごすことを難しくさせてしまいます。そのため、病状についてのご要望は遠慮なく医療スタッフへおっしゃって頂き、改善を目指すことが第一と思います。その上で「病人」としてではなく、さまざまな人生の歴史、人柄や思いをもったかけがえのない、ひとりの「人」としてお過ごし頂けることを、勝手ながら願っております。

また、世界各地で起こる紛争や災害、また疫病などによって、平穏な日常が壊されてしまっている方々の暮らしが、一刻も早く改善することを願います。



歴代緩和ケア病棟師長より

畠山 里恵

緩和ケア病棟が創立 25 周年を迎えられ、心よりお祝い申し上げます。

開設の頃の話の一部書きたいと思います。緩和ケア病棟開設の数年前にある会議で副看護部長から「是非当院にも緩和ケア病棟を作り、看取りの看護を充実させたい。」という熱い思いを聞きましたが、その頃は緩和がどのようなものか全く知りませんでした。その後、緩和に熱意を持つ看護部が中心となり有識者を巻き込んで病院長を動かし、緩和ケア病棟の設置が検討されたそうです。急性期医療を提供する国立大学病院で必要な病棟なのかと激しい議論があったそうですが、要望が通り、平成 12 年にめでたく国公立の大学病院初の緩和ケア病棟が開設されました。「理念」「病棟運営」など全てゼロの状態から立ち上げ、順調に運営されるまで並々ならぬご苦労があったと聞きました。また、開設時は多くのメディアが取り上げ、1 年間は見学者が絶えなかったそうです。多くの先輩方の思いが詰まった緩和ケア病棟です。25 年の間に終末期医療中心から早期からの緩和ケアの提供、緩和チームや緩和外来の立ち上げなどががん患者を取り巻く環境も大きく変わりましたが、多くの患者さんから「入院したい緩和ケア病棟」と選ばれ、いつ何時も患者さんに最善を尽くしてきたのは変わりません。これからも患者さんが自分らしく生きることを大切にし、充実した時間を過ごせる病棟でありますようよろしくお願いします。

斎藤 明美

3 年前コロナ禍での緩和ケア病棟配属は、病棟閉鎖からのスタートでした。2 か月間の病棟閉鎖後、6 月からの再稼働時は、緩和ケア病棟の役割について再認識したときでもありました。それは、病院内は面会禁止でしたが、緩和ケア病棟は、「〇〇さんのお家」という環境と患者さん・ご家族の精神的ケアが大切な役割でもあるため、面会禁止ではなく面会制限を行いながら感染状況に応じて対応しました。時々、ハラハラする時もありましたが、皆さんの協力のお陰で病棟内感染がなく過ごすことができました。

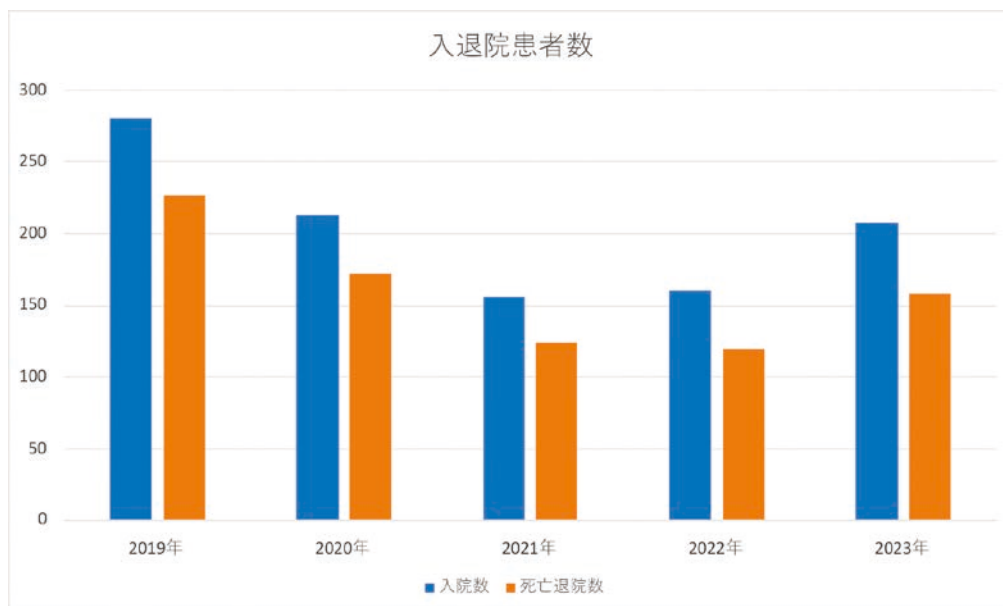
コロナ禍でいろいろな制限の中での日常の大切さを痛感し、コロナだからできないではなくどうしたらできるかを考え実践できたことはコロナ禍での学びでもありました。

緩和ケア病棟でのたくさんの方々との出会いが、患者さんの価値観を大切に寄り添う看護を教えていただき、日常を支えるという看護の基本を学び、自分を成長させてくれました。これからも緩和ケアの心を忘れず大切にしていきたいと思います。

どんな時も緩和ケア病棟は、誰にとっても癒しの場所であることを願っています。

診療統計

1月～12月まで	入院数	在院日数	死亡退院数	自宅退院数	施設入所数	転院数	稼働率
2019 年	280 人	19.4 日	227 人	—	—	—	66.20%
2020 年	213 人	28.8 日	172 人	—	—	—	60.20%
2021 年	156 人	18.3 日	124 人	—	—	—	34.20%
2022 年	160 人	21.4 日	120 人	—	—	—	44.70%
2023 年	208 人	18.69 日	158 人	26 人	13 人	15 人	55.60%



歴代の【七ツ森】を振り返る



年表

	2001	2002	2003	2004	2005	2006	2007	2008	2009	2010	2011	2012		
	小泉内閣が発足	が開園	東京デイズニーシー	地上デジタルテレビ放送が東京、大阪、名古屋でスタート	アテネオリンピックが開幕	二〇〇五年日本国際博覧会「愛・地球博」が開幕	トリノ冬季オリンピックが開幕	緊急地震速報の運用が開始	地上デジタルテレビ放送が東京、大阪、名古屋でスタート	鹿児島県の桜島が爆発的噴火	小惑星探査機はやぶさが七年間の宇宙の旅を終え帰還	東日本大震災が発生	第二次安倍晋三内閣が発足	
七ツ森発行	創刊号	2号	3号	4号	5号	6号	7号	8号	9号	10号	11号	12号	13号	14号



2013	2014	2015	2016	2017	2018	2019	2020	2021	2022	2023	2024
プロ野球・楽天が チーム発足以来初の 日本一に	ソチ冬季オリンピック が開幕	冥王星無人探査機・ ニューホライズンが 冥王星に最接近	スマホアプリのポケ モンGOが配信ス タート	上野動物園でパンダ の赤ちゃんが誕生	史上初めてとなる米 朝首脳会談	菅官房長官、新元号 「令和」を発表	無限列車編―の累計 興行収入百億円突破	劇場版「鬼滅の刃」 無敵列車編―の累計 興行収入百億円突破	冠 藤井竜王 最年少五 冠	WBC、日本が十四 年ぶり優勝	二〇年ぶりの新紙幣 発行
15号	16号	17号	18号	19号	20号 21号		22号	23号	24号	25号	26号

きょうゆうプロジェクト

医療にかかわるすべてのひとのこころを支えたい

共同代表、東北大学医学部医学科 6 年 宮下 琳太郎

医療現場では、立場にかかわらず、不安やストレスを感じる人が多いと思います。私たちは、そんな医療にかかわるすべてのひとのこころを支えたいという思いから生まれました。

きょうゆうプロジェクトは、音楽を芸術として追求するだけでなく、社会の中で実践したいという思いから発足した、プロの音楽家と医療従事者、医学生の実体です。これまで、7つの施設を訪問し、職員と協働して、生演奏を届けてきました。ここ、東北大学病院緩和ケア病棟でも2回音楽会を開催しました。

終末期に患者さんやご家族が抱く苦痛は、多方面に渡ります。これに対応するには、さまざまな分野の人が互いの得意を生かしていくことが必要ではないでしょうか。そして、音楽家にもできることがあると思わずにはいられないのです。

音楽は、時間の芸術です。時間的な長さがあることで、感情が動きます。昔の曲を、時空を超えて、今この瞬間のものとして体験することができます。同じ体験を共有することで、コミュニケーションや共感を引き出します。こうした音楽の特徴を活用すれば、今まで手の届かなかったところに、アプローチできるかもしれません。患者さんのこころを癒すだけでなく、ご家族にとっても、音楽会が患者さんとの思い出として、人生の大切な1ページになれば、これほど嬉しいことはありません。



病室を周り、リクエストを演奏します

これまでの活動を通しての気づきもあります。音楽は、ひとたび音楽家の手を離れると、その人の心にぴたりとはまるように形を変えていくように感じています。そして、その背景には、聴いている方それぞれが、音楽と自分の記憶とを結びつけていることが関係していると考えています。同じ曲を聴いていても、立場や境遇が異なる人でも、その人にとってぴたりなこころの薬になるのです。これは薬にもできないことかもしれません。

まもなく、医師としての生活が始まろうとしています。実際に現場で働くことで、医療における音楽のあり方についても考えが変わるかもしれません。そんな変化も楽しつつ、活動を続けていきます。私たちの挑戦をサポートしていただけたら幸いです。今後ともどうぞよろしくお願いいたします。



スタッフのみなさんと

また、私たちは、スタッフのこころも支えたいと考えています。誰かを支えるには、まず自分のこころに余裕が必要です。緩和ケアの場で働かれている方は、きっと、患者さんにご家族を思う気持ちが人一倍あるのではないかと思います。それがゆえに、本当は患者さんやご家族のためにやりたいのにできないもどかしさや、緩和ケアという性質上、心が揺れ動くこともあると推察します。私たちの特技である音楽を使って、スタッフのみなさんの思いも叶えていただきたいと願っています。

音楽家が医療現場にできること

共同代表、ヴァイオリニスト 森 里香

手軽に音楽を聴くことができる現代。音楽家の仕事は、生演奏による特別な空間の提供であると考えています。音楽家である私が、緩和病棟での音楽会を通して感じた、音楽が医療にできることをお伝えしたいと思います。

まず、病室での音楽会は人間性を引き出せると感じます。病室で演奏すると、聴き手は音楽家の息遣いや体の動き、奏者の想いや楽曲の雰囲気を直に受け取ります。それらが、今までにない表情・本音等の人間性を引き出すと考えます。また、曲のリクエストをきっかけに曲にまつわる患者さん・ご家族の思い出を聞けることがあります。新しい一面を知り、病気以外の話をする事は、スタッフとのコミュニケーションに良い影響を与えるはずです。

そして私は、音楽会が残す思い出に、大きな可能性を感じます。懐かしい音楽を聴いて、匂いや情景を思い出した経験はありませんか？音楽は、聴いた時の情景と共に思い出となり、それらを思い出することでも楽しめるのです。患者さんご家族にとって、音楽会は特別な空間です。演奏を聴き、音楽家と話したことはとても濃い思い出になるでしょう。もし患者さんが音楽会の思い出を話す時、音楽会で聴いた曲を聴く時、ひととき病気を忘れてはいるはず。そんな患者という肩書をおろし、“そのひとでいる時間”が、ここを支え、本人らしく生きぬいていくことにつながるはずです。

今後も、私が作る空間が誰かのこころを支え続けるよう、大切に演奏していきます。

医学生が考える音楽の役割ときょうゆうプロジェクトの取り組み

東北大学医学部医学科5年 北村 開志

緩和病棟に限らず、医療現場において音楽の活用が進んでいます。東北大学病院では月に一度ホスピタルモールで演奏会が行われ、小児病棟などでも生演奏が提供されています。

一方、音楽は「流す」もの、または演奏者にプログラムを全面的に依頼するものであるという認識が広くなされています。その場合、聴き手が置き去りになることがあります。特に医療現場では、聴き手（患者・家族・医療者など）の意向に沿った音楽提供が重要です。

緩和病棟において、きょうゆうプロジェクトは個々の患者に対するオーダーメイド音楽会を定期的に提供しています。具体的には、数日前にリクエストを受け、楽譜を手配し、病棟の医師やスタッフの助言を受けて誰にどう提供するか考えます。また、当日の依頼にも対応しています。こうした演奏会は、聴き手のみならず奏者の満足度も高い点が特筆されます。

医療現場には、患者からの要望はもちろん、癒しを求めるスタッフや家族など、多様な音楽のニーズがあります。しかし、特に東日本では人手や予算の問題で積極的な導入が難しい場合もあります。私たちは音楽家を擁する団体として、医療現場への音楽提供を続けていく所存です。そして「学生」という身分を活用し、病院と協力しながら、音楽が当たり前存在する風潮を創り出すことを使命と考えて活動しています。



医療現場に
もっと音楽を
もっとあたたかな医療を

新しく加わった病棟スタッフ

緩和医療科 医師 大江 千紘

浪人の末に迎えた大学一年生の春、父を癌で亡くしました。日に日に黄色く痩せこけていく父を見るのが苦しくて、看病で遠距離通学をする疲労もあり「お父さん早く治ってよ。」と言ってしまったことがあります。父は「ごめんね、良くなるから。」と言いました。治ることなんてないのに、もうすぐ死んでしまうことは分かっていたのに。この一言への後悔は消えることなく二十数年が経ちました。今緩和病棟で働き、父が最期の時をどう過ごし、何を感じていたのかを想像しています。私も親になり「良くなるから。」と言った父の気持ちが少しだけ分かるようになりました。

患者さんだけでなくご家族も、毎日生まれる感情は体調によって変化し、時には割り切れない複雑な感情に振り回されることもあると思います。患者さんの苦痛が取り除かれ、ご家族にも心穏やかな日々を過ごしていただけるよう、医者として尽力いたします。どうぞよろしくお願い致します。

緩和医療科 医師 石川 理沙

今年の春より緩和医療科でお世話になっております石川理沙です。

初期研修医のころ緩和医療に興味を抱き、内科医として研鑽を積む中でがん患者さんと接する機会もあり、さらに緩和医療への思いを強くしました。

患者さんの最期に立ち会わせて頂くことも多く、その度に、自分は患者さんの何を知っているのだろう、何に向き合ってきたのだろうと立ち止まることがありました。出会うのは病気を患った患者さんですが、その方のそれまでの人生、大切にしてきたことは何なのかを理解することも重要だと感じていました。しかし実際は難しく悩む日々でした。その経験を今は糧にして、患者さんの苦しみや痛みと向き合いながら、一人一人の患者さんと時間を共にしたいと考えています。

思うようにいかないこともあります。それを乗り越える中で得られる学びに感謝して精進いたします。今後ともどうぞよろしくお願い致します。



看護師 大沼 美智子

今年度4月から配属になりました。以前も勤務していましたが、以前とは違う面も多く、慣れるまで時間がかかっており、患者さんやご家族、諸先輩方、同僚の皆さんに支えていただき過ぎております。

入棟後まもなく退院される方や、転院後再入院される方など経過は様々ですが、ご本人とご家族が望む過ごし方ができるよう努めていきたいと思います。

また、入棟面談の担当をすることもあり緩和ケアセンター看護師の皆さんと協力し、入棟される前の方々の不安を軽減し心配事を解消するよう関わっていききたいと思います。

これからも今までの病棟（緩和ケア、泌尿器科、皮膚科など）・外来での経験や、患者さんご家族からの学び、研修等での学びを活かしていきたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

看護師 穀田 知秋

東日本大震災の年に父を在宅で看取り、その後、緩和ケア病棟で働き始めました。当初は、患者さんからの問いかけに答えを見つけられず、何もできない自分の無力さを痛感する日々が続きました。しかし、患者さんやご家族の悲しみや思いに寄り添うとはどういうことかを考え続ける中で学びを深め、心不全の緩和ケアにも携わる貴重な経験を積むことができました。

この度、9年ぶりに緩和ケア病棟に戻り、新たな気持ちで皆様と共に働けることを大変嬉しく思っております。患者さんやご家族の希望や価値観を尊重し、安心して過ごせる環境を提供するために尽力したいと考えております。また、チームとして互いに学び合い、より良い看護が提供できるよう努めてまいります。

どうぞよろしくお願いいたします。



看護師 高橋 和枝

これまでがん患者さんと関わる中で、緩和ケア病棟では実際どんなケアをしているのかとても関心がありました。移動して4ヶ月が過ぎ、患者さんやご家族に対し真摯に向き合っている先生方や看護のスペシャリストのスタッフの姿を目の当たりにしながら、とても勉強になる日々を送っています。緩和ケア病棟では、患者さんやご家族の希望を伺いながら意思が尊重されるために、また適切なタイミングで対応できるよう、それぞれの立場で話し合いが重ねられてケアが提供されています。私も一日も早くその一員となれるよう日々研鑽したいと強く思いました。

私は、コロナ禍に父を亡くしました。面会もできないまま、寂しさと悲しみと不安が募っていきました。しかし、最後の最後にスタッフ皆さんの配慮により、父を看取ることができました。人生でとても大切な時間を過ごせたことに感謝しかありませんでした。そのような経験からも、患者さんやご家族の想いを自分事として、どんな時でも真摯に向き合っていきたいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

看護師 鈴木 明子

今年4月より緩和ケア病棟に異動となりました。昨年度までは外来で12年間勤務しておりました。外来では、歯科、耳鼻科、皮膚科、眼科といった感覚器系の外来を経験してきました。病棟勤務は10年以上ぶりで慣れないことばかりですが、スタッフの皆さんに優しくしていただき、日々なんとか頑張っております。

6年前にこちらの病棟で父がお世話になり、看取っていただきました。スタッフの皆さんにとっても良くしていただき、家族皆が感謝しておりました。実際にこちらの病棟に勤務するようになり、スタッフの方々の患者さんやご家族への接し方、ケアのひとつひとつを見ていく中で難しさを感じるとともに、とても勉強になっております。

日々の業務に追われ自己満足にならないよう、患者さん、ご家族の思いに寄り添った看護ができるよう頑張っていきたいと思っておりますので、よろしくお願い致します。

看護師 佐藤 千佳

昨年度は腫瘍内科で勤務しておりました。その際、サポーターケアチームに介入いただくことも多く、患者さんの心身の苦痛症状が和らいでいく様子をみていて、緩和医療についての興味・関心が強まり、緩和ケア病棟への配属を希望しました。

緩和ケア病棟は、木の温もりや四季を感じる環境でお誕生日会などのイベントもあり、温かい雰囲気が素敵な病棟だなという印象です。

異動して4ヶ月経ちますが、自分の看護が患者さんやご家族に合っているのか悩む日々です。大切なお時間に立ち会わせていただいていることに感謝し、自分には何ができるのかを考え、緩和ケアを学んでいきたいと思っております。

至らない点もありますが、先輩方に相談しながら、患者さんやご家族が少しでも心身ともに穏やかに過ごすことができるよう、サポートさせていただきます。

看護助手 佐藤 咲子

4月に緩和ケア病棟に異動になり、あっという間に4ヶ月が過ぎようとしています。
異動が決まった時、「西17階？ どんどころ？」と思いながら、10年以上前に夫と見た入棟面談のビデオを思い出しました。夫は入棟前に亡くなりましたが…。

「助手って何をするんだろう？」師長さんやほかの助手に聞いても、「患者さんの移送は無いから、もっぱら清掃じゃないの。」と言われました。

分刻みの患者さんの移送やオンコールの対応などを15年以上してきた私に心の余裕などありませんでした。しかし、緩和ケア病棟は、季節ごとの飾りや至る所にいろいろな生花があり、そして、音楽が流れています。私の心に余裕と安らぎを与えてくれます。

患者さんのお手伝いやスタッフの皆さんが気持ちよく仕事ができるように、少しでも力になればと思っています。これからもよろしくお願いします。

医療事務員 佐藤 禎子

今年の4月から緩和ケア病棟で勤務しております。患者さんとの関わりは少ないのですが、家族の方を通して事務手続きをしております。

患者さんのケアについて先生方と看護師さん達が話し合い、情報共有等をしており、患者さん・家族の方に寄り添っている姿を見て感動しております。

緩和ケア病棟は雰囲気も良く、時間がゆっくりと流れている病棟で、働く事が出来て良かったと思っています。

患者さんが退院され、家族の方からお礼の言葉を聞いた時、緩和ケア病棟に関わって良かったと思います。

少しでもお役にたてるように頑張りますので、よろしくお願いします。



患者さんの作品

チームスタッフより

地域医療連携センターソーシャルワーク部門 根本 直美

昨年度3月から5年ぶりに緩和ケア病棟の担当となりました、ソーシャルワーカーの根本です。久々で当初は緊張もありましたが、先生方や看護師さんをはじめ、スタッフのみなさんが作り出す穏やかで温かな病棟の雰囲気は、以前と変わっていないなと感じています。

緩和ケア病棟でソーシャルワーカーが担う役割の一つとして、入院が長期となった場合の転院支援、施設入所支援があります。限られた資源である緩和ケア病棟を、より多くの方にご利用いただくためには必要なことです。しかし、緩和ケア病棟に入院し安堵している、また、ずっとここで過ごしたいと思っている患者さんやご家族としては、不本意に感じられることもあるかもしれません。すべてのご要望に添うことは難しいことではありますが、そういった患者さんやご家族の思いをしっかりと伺い、受け止めながら、一緒に最善の方法を探していきたいと考えています。よろしくお願いいたします。

地域医療連携センターソーシャルワーク部門 梅木 諒

私は、ソーシャルワーカーとして患者さん、ご家族と面接を重ねながら退院支援や相談支援を行っております。患者さん1人1人病態も違えば、社会背景や経済状況、ご家族状況も違います。そのような中で、患者さんのより良い療養環境を整えるのが私の仕事です。緩和ケア病棟は療養先の選択肢として非常に大きな役割を担っております。入院中の緩和ケアはもちろんのこと、そこから先の本人の希望する療養先への調整も各専門職が一丸となって取り組んでおります。近年、宮城県内でも療養先として自宅や病院以外の選択肢として医療特化型の施設（ホスピス型住宅）が増えてきています。院外の社会資源の情報を常にアップデートし、院内に還元していきたいと思います。そして、患者さんそれぞれの希望に添った療養先の提案とスムーズな調整を行っていききたいと考えております。今後も多職種との連携をさらに深めながら職務を全うできれば幸いです。よろしくお願いいたします。



ボランティアコーディネーター 舟山 るみ子

今年度、緩和ケア病棟では、16名のボランティアが活動しています。コロナ禍での活動休止期間を経て、昨年度より再開しました。3年間というブランクがあったにもかかわらず、同様の活動が再開でき、ボランティアの皆さんの意欲の高さを感じました。私は、昨年9月よりボランティア室勤務となった新米コーディネーターです。気負われることなく、自然体で活動されている皆さんから「ボランティアとは？」という問いの答えを、学ばせていただいたように思います。

緩和ケア病棟のラウンジは、花があふれ、季節折々の飾り付けがされています。コロナ以前は、患者さんが集う場所であったようですが、その光景を見ることはできていません。これからも、患者さんご家族、そしてスタッフの皆さんにも、安らぎを感じていただける空間の演出を、サポートしていきたいと思っています。

7月現在、新規ボランティアを募集中です。本誌が発行される頃には、新たなメンバーを迎え、活動を広げている予定です。

ボランティアコーディネーター 藤本 容子

4月からボランティアコーディネーターとして勤務しております。私自身未熟ではございますが、ボランティアスタッフと共にラウンジの生け花、ティーサービス、パストラル・ハーブ演奏等を通して活動しています。活動時に患者さんやご家族の皆さんが「お花がいつも綺麗で見るのを楽しみにしています」「とても癒されます」「ありがとう」等と笑顔で声をかけてくださり、私達の方が日々励まされ、元気をいただき、やりがいを感じております。

コロナの影響でまだ活動に制限がありますが、感染が落ち着いた頃にはラウンジで患者さんやご家族の皆さんと一緒に楽しめるミニコンサート等も検討しております。皆さんの笑顔あふれる陽だまりのような温かい空間を創っていきたいと思います。

どうぞよろしくお願いいたします。



お孫さんから患者さんへ

スイーツフェア

栄養管理室 佐々木 まなみ

私たち管理栄養士は、入院中の患者さんが少しでもお食事を召し上がっていただけるように、お部屋にお伺いしています。食欲や食べやすいものについてお話を伺う中で、「甘いスイーツをひとくちだけ食べたい。」とお声を聞くことが多かったことから、スイーツフェアのイベントを開催する事になりました。イメージはホテルのスイーツビュッフェのような、ほんの少しの量で、見ただけで嬉しくなるようなスイーツを目標にしております。月に一回ではありますが、試作を繰り返し提供しています。入院生活の中でも四季を感じていただけるような旬の果物を使ったり、見た目にもこだわって作っており、患者さんにお届けしたときの「わぁー！！」というお声が励みになっています。今後もっと和んでいただけるようなスイーツをお届けできるよう努めて参ります。



7月
あんみつ



8月
メロンソーダ風ゼリー
浮島
果物（シャインマスカット）



6月
杏仁豆腐～ゼリーのせ～
浮島
果物（種無しぶどう）

栄養管理室 田口 雄也

スイーツフェアは2022年9月から月に1回、開催しております。緩和ケア病棟で栄養・食事サポートをさせていただいているなかで、「のど越しの良いさっぱりしたものが食べたい。」とお話しされる方や食欲がわかず食事が苦痛となってしまう方など、食事に関する困りごとを抱えていることが多々あると日々感じております。食を通して、入院中でも季節感やハレの日のような特別感のある時間が過ごせればと思い、スイーツフェアを企画しています。スイーツは手づくりで、調理スタッフと試行錯誤しながら食欲の重要な要素である香りや見た目、食べやすいサイズ感にもこだわっており、患者さんからは「もっと食べたい。」「食べるのがもったいない。」と感想をいただき、調理スタッフの励みにもなっております。スイーツフェアを通して、より多くの方に些細な喜びを感じていただければ幸いです。



9月
梨ゼリー
紅葉ようかん
季節の果物（ぶどう）



10月
ティラミス
モンブラン
季節の果物（いちじく）

療養中のひととき





編集後記



今年、緩和ケア病棟開設と七つ森発刊 25 周年記念となりました。

そこで、歴代の七つ森を振り返ってみたところ、1 年に複数回発刊されている年や、1 回も発刊されていない年があることが分かりました。

5 周年記念の第 8 号から、現在のように 1 年に 1 回の発刊となったようです。

歴代の七つ森には、過去の行事や患者さんの素敵な作品などが載せられており、心が温まりました。今回も、歴代の七つ森に恥じないようなものとなっていることを願います。

ご寄稿いただきました皆さん、写真にご協力いただきました患者さん、ご家族の皆さん誠にありがとうございました。

令和 6 年度 七ツ森 編集委員会一同

七つ森

Nanatsu-mori

第 27 号

令和 7 年 2 月発行

東北大学病院 緩和ケア病棟
〒980-8574

仙台市青葉区星陵町 1-1

TEL : 022-717-7986

FAX : 022-717-7989

<http://www.pcc.med.tohoku.ac.jp>

印刷：株式会社 センキョウ